

2021/1/7

(うと Q 世話し 修正版 我が意に反して AI、どうせ AI を使うなら )

まず、自分はどこの宗教団体にも属しておりませんが、

ですが、自分が観察するに、

天は往々にして、我々が想像したり、望んだりする分かり易い、見えやすい、気づきやすい形で、その「解」を示すことは殆どないように思います。

逆に殆どが、思いもよらぬ、全く違った形や方法、現わし方でその「解」を示すよう泣きが致します。

例えば

「きれいな花が欲しい時」に「地中に花の。種」という形で、もう答えが出されているような場合です。

この例のように既に「解」や「ヒント」は鼻から示されているのに、我々はそれに気づかず「ない、ない、天は我を見捨てたか」と騒ぐことに。

天と言っても別に上方からそれが示されるとは限りません。喩えて「天」と言っているだけで、その何ものかは下方かもしれませんし、右方、左方、斜方、どこから来るかさえ分かりません。

なので、四方八方、行住坐臥の常時「めっばって」いなくてはなりませんし、従来の観念に囚われていてもいけません。

ですので、こういった作業は、とても AI にこそ向いているような気がします。それこそ、big data や機械学習、深層学習なんかの水を得た魚のように効果を発揮する気がしてなりません。

その AI に全くの門外漢ジイサンである自分のかすかな裏付けとしては古来より申し伝えられている

「天網恢々疎にして漏らさず」とか

「袖ふれあうも多少の縁」とか

「瓢箪から駒」や「ひょんなことから」

等の教えの数々です。

要するに「投網は大きく打て」「何が役に立つか分らん」「それはひょっこりやってくる」の世界。

ところが人間様は、その AI の力をたった一点にだけ絞り込んで使っているかのようです。その一点に全ての data 解析能力を集中している。

曰く

「お金儲け」

即ち、経世済民、世を経（おさめ）、民を済（たすける）ではなく悪い意味でのそれを「経済活動」と称して。

之では使い方が反対です。「投網的使い方」ではなく「漏斗（じょうご）的使い方」

注ぎ込む先の検討を十分しないままこんなことをすれば、碌な事にはまりません。

AI の本領は、膨大な data 野中から注ぎ込む先とその優先順位の探索に効力を発揮することにあるのに。

言わずもがなの事ですが、誰かの都合という色めがねによる恣意的な物に対して AI はねじ曲がった指示の通り「変な答え」しか出せません。

之は有名な話ですが Amazon の採用試験で AI が面接官を行ったところ、男性応募者ばかりを優先的に面接させた結果、AI が採用主に「忖度」してしまって、男性にばかりに受けの良い質問をするようになったとか。

AI を自分は好きではありませんが、どうせ使うなら忖度抜きの「大投網的」に使って欲しいです。